

盆栽の図像学

第八回

解説／田口文哉

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

歌川国貞《ゑん日乃景》
春梅齋北英、丸丈齋国広《見立岡嶋屋璃寛》
見立大和屋紫若（しじやく）歌川国貞《ゑん日乃景》
大判錦絵三枚続 右37.0×25.1cm 中37.0×24.5cm 左37.0×24.1cm 文政後期（1824～30）頃
版元／山本屋平吉 さいたま市大宮盆栽美術館蔵春梅齋北英、丸丈齋国広《見立岡嶋屋璃寛》 見立大和屋紫若
大判錦絵二枚続 右38.0×26.2cm 左38.1×26.2cm 天保3年（1832） 版元／天満屋喜兵衛 個人蔵浮世絵師紹介
歌川国貞（うたがわくにさだ）天明6～元治元年（1786～1864）
後に三代歌川豊国を襲名する江戸末期の浮世絵師。数多い浮世絵師のなかでも最大級の作例を残した。庶民が鉢植を楽しむようになる時代に活躍した浮世絵師であり、非常に多くの鉢植が彼の浮世絵版画にも描きあらわされている。当時の鉢植・盆栽文化を知る上で、最も参考になる絵師と言える。

似て非なる二枚の浮世絵

今月は二枚の絵を用意した（116頁に二枚目を掲載）。夏の夜の縁日の情景を描いた二点の錦絵である。この二枚、見比べて、おやっと思ふことだろう。同じ絵柄のようであり、どうやら少しずつ異なる点があるらしい。前にいる女性たちは似たようなポーズで立っていて、背景に細かくさまざまな描かれた道具立てにも共通点があるようだ。しかし、よく似た印象ではあるが、少し落ち着いて観察をはじめると、まったく異なる点が目に飛び込んでくる。前にいる人物の顔は、れっきとした美人の女性に対して、迫力のある特徴的な容顔の女性。そして背景の構成は、どうやら三枚続の絵の方から、中央の絵をうまく抜いてつなげたものであるとわかってくる。三枚続の絵と、二枚続の絵の制作年代の差はわずか数年。二枚続の絵の作者は、明らかに三枚続の絵に範をとって、そこに脚色を施した独自の絵作りをしているようだ。絵師のゲームとも言えそうな二枚の絵の関係。こうした比較の楽しみが、この絵をたまたらなく興味深いものにしてくれるのである。

夏の夜の縁日

ここで詳しく二枚の絵を見てゆこう。三枚続の絵は、題名を「ゑん日乃景」、すなわち「縁日の景」というように、夏の夜の縁日の情景を描いたものである。三枚の紙の一枚ごとに女性を中心とした全身肖像をあらわし、それでいて三枚をつなげたパノラマ画面によって、露店が並ぶ様子を描いている。三枚続の紙の構造をうまく利用しているのだが、さらに各紙によって露店の種類をも描き分けている点に、この絵の巧みな構成を読み取ることができる。

向かって右の紙には、「ひょうそく」と呼ばれる照明具に照らされた、二段の棚を設えた植木屋の露店が描かれている。右端には、満開の紫陽花が青い花を咲かせており、その上部に隠れるようにして、松の鉢植の姿がのぞいている。その左には染付鉢に植えられた万両とつつじが並び、菊と思われる花と朱色の花を咲かせた植物が根巻きの状態で地面に置かれている。下段に移っても染付鉢の姿が見え、その脇には山百合が大きな花を咲かせており、右下には積まれた芝の上に蘇鉄の鉢が置かれている。

その前にいる白地の浴衣を着た女性は、この露店で買い求めたものであろうか、陶器の鉢に植えられたなでしこを右手に掲げもっているところだ。後ろに美人の描かれた団扇で口元を隠した女の子を連れ添い、振り返る姿もさまになっている。さらに、その浴衣の藍染の紋様には絵師の遊び心が隠されており、実は版元の山本平吉の名や、絵師である国貞の名などがさりげなく描きこまれている点にも触れておきたい。

次に中央の紙に移ると、後ろに描かれた円形のたらいには水が張られており、そこに無数の金魚が泳いでいる姿が見える。日除けのすだれや、金魚をすくう網なども確認できる、金魚屋の露店である。そしてその左には、市松文様の装飾が目立つ大きな屋台があらわされている。これは何屋の露店であろうか。当時の人々にはすぐにもわかったのであるうかが、我々は絵にあらわされたいくつものヒントからこれを読みとつていこう。まずはこの屋台の軒先に吊るされた、実にさまざまな形態をした籠が一つ目のヒント。次に画面中央部左端に描かれた丸い黒い枠が二つ目のヒントである。この黒丸の中に、かすかに白い点がいくつも飛んでいるのが見えるだろうか。そう、つまりこれは蛍を入れた籠をあらわしているのである。屋台にかけられた提灯に、「ほたる、松むし、鈴虫、草ひばり」（個人蔵の別版を参照）などと記されているように、この屋台は虫屋をあらわしているのだ。

そして、金魚屋と虫屋の前にいてそれぞれ向き合う女性たちには、なんらかの交渉があるように描かれている。金魚屋の前には、提灯持ち提灯の文として絵師のサインである「年玉」印が描きこまれている（を連れ、着物を着た裕福そうな女性が後ろを振り返り、その先には、団扇をもった浴衣姿の女性が一人。お歯黒をした既婚女性と思われるが、二人の間には静いことが起きつつあるように見える。それを提灯持ちの見上げのような目つきと、にやりと笑うような口元の表現によって醸し出しているようだ。女性のかんざしの飾りによって顔が半分隠されているミスティアスな描き方にも、そうした出来事を隠れ見る男の心情が垣間見えてくる。

ここまで見てきた三枚続の絵と同様に、二枚続の絵についても情景の基本的な構造は一致している。ただし、中央にあった金魚屋は省かれ、



ここでは植木屋と虫屋のみ描かれていることになる。さらに言えば、構造のみならず、植木屋と虫屋の屋台、そして前にいる女性たちについても、二枚の絵を重ねて透かしてみると、透き写したように細部まで描線が一致する部分も認められるのである。この二枚統の絵は、多くの部分をコピーして利用しつつ、しかし二枚の大きさに小さめるために、右側の女性の向きや屋台の大きさ、そして鉢植えの配置などの細部を描き変えて、一つの図として上手に再構成しているのである。

見立て(パロディ)のゲーム

歌川国貞による三枚統の「ゑん日乃景」を見立てた二枚統には、絵の中に「見立 岡嶋屋瑠寛」などと文字が記されている。これらの文字が指し示すとおり、実はこの二枚統にあらわされた人物とは、右が上方の歌舞伎役者である二代目嵐璃寛、左が江戸と上方で活躍した役者である初代岩井紫若なのである。つまりこの絵は、絵の構図自体も先行例を見立てて制作したものであるが、その内容も、役者その構図にあてはめてあらわした役者絵になっているという、二重の見立て絵と言える複雑なものなのである。

そうしたことがわかると、はじめに見た女性の特徴ある容貌についても合点がいくことであろう。つまり、およそ美人画の顔とは言えない表現は、歌舞伎役者の似顔であったからなのだ。元の絵に比べて、見立て絵の役者の顔の方がやや大きく描かれていたり、左の役者の立ち姿については、見得を切るような勇ましさがあらわれている点など、役者絵としての要素が随所に織り交ぜられているのである。このように、一方に夏の夜の縁日の情景を借りて女性たちをあらわした美人画としての図と、他方にそれを巧みに見立てた役者絵としての特徴をそれぞれ比較して見ることによって、いわば絵師のゲームに、我々も参加していたのである。その一つの側面として、女の子がもつ団扇の図像が、美人から役者へと替わっていることも最後に挙げておこう。(続)

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知

■さいたま市制10周年記念「盆栽×写真vol.1 大和田良写真展 FORM—SCENERY SEEN THROUGH BONSAI—」
会期：平成23年5月21日(土)～7月13日(水) (毎週木曜休館)
概要：本年の日本写真協会「新人賞」を受賞した、新進気鋭の写真家大和田良氏が、大宮盆栽美術館所蔵の盆栽を被写体として新作シリーズ「FORM」を制作しました。この撮りおろしの写真展を初公開いたします。日本の伝統的な樹木の型や空間の取り方を、盆栽を通して発見し、金屏風を背景に写真によって再構成してあらわす、野心的な試みです。大宮盆栽美術館の写真作品展「盆栽×写真」の記念すべき第1回展となります。

■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091

著者プロフィール

田口文哉 (たぐち・ふみや)
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了 芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。